

- 茶 道
- 琴 道
- 華 道
- 雅 楽

- 狂 言
- 京 舞
- 文 楽

茶 道

茶をたしなむ風習は中国において8世紀頃に始まり、わが国では平安時代から鎌倉時代にかけて禅僧によってもたらされました。はじめは禅寺や貴族社会で、もっぱら健康のために飲まれ、次第に嗜好飲料としてひろく一般にも普及してきました。

茶の湯は戦国末期から町人や大名の間に大いに流行し、千利休が“和敬静寂”を理想とする茶の湯を完成し、今日の茶道の基礎をつくり上げました。江戸時代に入り、茶道には各流各派に分れ日本人の生活と文化に深い影響を与えて今日に至りました。

ギオンコーナーでお目にかけておりますお点前の形式は、立礼式といい、外人客および洋服の方が多くなって来たので特に考案されたものです。

琴

琴は今から1,300年ほど前、中国からわが国に渡来したものです。はじめは宮廷雅楽に用いられましたが、中世、筑紫流を経て、万治、寛文年間、八橋検校が大成しました。

上方では生田流、江戸では山田流により発展しました。組歌、段物のほか多くの歌曲があり、三味線、胡弓、尺八とも合奏されます。その美しく荘重な音色はひろくわが国の人々に愛されるようになり、その古典的な香りあふれる絃のひびきは現代人の心をもよくとらえています。

華 道

花の美しさを愛する風習は人類の起源と共に古くからあります。日本でこれを壺や瓶にさして鑑賞するようになったのは約1,500年前、仏教伝来ののち、仏前に花を供えたことからとされています。その後桃山時代に入ってから茶の湯が興って来るにつれ、茶室にふさわしい花を飾るようになり、次第に幾つかの流派を生じ、その技術が磨かれ、種々の約束もつくられ単なる花の鑑賞ということ以上に宗教的、道徳的な意味が加わって華道が確立されました。

いけばなの型を大別すると立花・生花・自由花・投入花・意匠花・前衛花の6種類になります。立花は仏前の供華からはじまって室内装飾の花に変化し、江戸時代に最もさかんに行われた形式で、日本のいけばなの基礎ともいわれます。生花は江戸中期以後に始まったいけばなで、立花と同じように伝統的な花型が定まっておりますその型の中に自然の草木の姿をあらわそうとしたものです。これに対し、近代的な感覚をもっているのが投入花と自由花で、これらは同じ種類のいけばなであり、花をつとめて自然のままに花器に移して活けるいけばなです。手法もかなりよく似ていますが、投入花の場合は花器に陶器の壺や竹箆を用いることが多く、自由花は陶器の水盤を用いることが多い関係上、実際に活ける場合にはその技法が異なります。

雅楽

聖徳太子の時代を中心として、古く応神天皇から聖武天皇に至る500年ほどの間に、わが国には多くの楽器や楽曲が伝来しました。朝鮮からは新羅楽・百濟楽・高麗楽、インドからは林邑楽・アジア南部からは伎楽、中国からは唐楽、同北部からは渤海楽が伝えられました。これらの中には既に消滅したものもありますが、平安時代の初めに仁明天皇が中心となり、外来楽の日本化が進みました。曲の上にも楽器編成の面にも大きな変革が加えられて、日本の朝儀や仏教の法楽にふさわしいものに改められ、さらに新楽曲も創作されるようになりました。これらの古楽の中には歌謡を主とする郭曲と、楽器演奏のみの雅楽とがあり、雅楽には舞を伴う舞楽が数多くあります。ギオンコーナーでご披露しますが、この舞楽です。

代表的なものは“蘭陵王”（らんりょうおう）や“納曾利”（なそり）などです。

狂言

狂言は能楽の合間にその時代の日常の言葉で演じられる一種の喜劇です。狂言の歴史は15世紀にさかのぼります。狂言はかつては、曲芸的な寸劇を含んだ原始的な舞踊から成り立っていると考えることができ、田植や豊作を祈願するため神社の祭の時に演じられたものでした。

16世紀以後、狂言は時の将軍の庇護のもと、民間にひろがり、特に武士の間では、彼等の教養の一つとして考えられていました。

能の象徴性とまったく対照的な狂言の写実性は演劇批評家達の間でも、その狂言の内容とともに注目を集めるようになりました。

今日では、狂言には大藏流、和泉流の二流があります。面は能と異なりごく少数の狂言のみが使用されています。

狂言：棒縛り — ぼうしばり — 筋書

いつも主人が留守になると酒を呑む、横着者の太郎冠者と次郎冠者、今日も主人が一策を案じ、次郎冠者に棒の使い方を所望し、すきを見て両手を棒に縛ります。

太郎冠者がこの体を見て面白がっているところを、これも又後手に縛ります。主人は兩人に留守を言いつけて安心して外出します。その留守中に太郎冠者と次郎冠者は不自由さを克服しての酒盛りを始め、舞など舞ってはしゃぎます。

京舞

舞踊は踊りと舞の2つに大別されます。踊りは江戸時代に発生した歌舞伎の系統をひくもので身体の動きで感情を強く現わすのが特徴です。これに対し、舞は京都を中心とした関西地方に発生したもので、能楽の系統をひくため比較的省略された動きの中で豊かな表現をみせようとしており、座敷舞といわれています。京舞はこの座敷舞で、江戸中期、文化文政の頃、京都でおこり、発展してきたものです。京舞はその創始にあたって、京風の舞の中に品格の高い宮廷風の舞いぶりを取り入れましたが1,000年間の王城の地である京都の自然と風物とによくとけ合い、優雅で、美しい京都のもつ代表的な芸術となりました。毎年春にひらかれる「都をどり」もこの京舞を基調としたものであり、祇園の芸妓、舞妓によって演じられる京舞は、その衣裳の美しさと相まって、優雅かつ絢爛そのものであり、人々の心をとらえています。



文楽

人形を操って庶民の娯楽としたのは平安時代の傀儡師が始まりです。彼等はアジア大陸から渡って来た漂泊の民で、人形を舞わずと共に種々の芸を見せ、女は歌を謡い客を慰めました。これが室町時代になると人形を舞わず技も巧みになって来ました。

また、浄瑠璃は享禄年間(16世紀前半)「平家物語」を語った琵琶法師が牛若丸と浄瑠璃姫との恋物語を書いた「浄瑠璃十二段草子」を扇拍子で語ったのが始まりであると伝えられています。

永禄の頃(16世紀中頃)琉球から渡来した三味線が一躍新しい時代の伴奏音楽としてかわり、慶長の頃(17世紀初頭)西宮の傀儡師と結びついて人形芝居小屋を作り興行するようになりました。

その後、民衆の大きな支持を得て民衆芸能として発達し、創始期の古浄瑠璃は大阪で元禄年間(18世紀初頭)に活躍した竹本義太夫によって義太夫節として集大成されました。人形遣いの技術も進歩し、享保17年(1732)にはじめて一つの人形を3人で遣う方法が案出されました。

義太夫劇は大阪の庶民の現実生活を基礎とする完全な民衆劇で、江戸時代には空前の全盛をきわめたのであります。

人情の機微をたくみに描いた義太夫狂言は幾多の名人の出現と相まって、今日に至っても、なおその生命を保持しています。

八百屋お七 一火の見櫓の段一 解説

八百屋お七の浄瑠璃は紀海音の「八百屋お七恋緋桜」などがありますが、安永二年(1773)四月、大阪北堀江の芝居で初演された本作が決定版となりました。菅専助、松田和吉、若竹笛躬の合作、八段続きで内容は「潤色江戸紫」(為永太郎兵衛ら作、延享元年初演)の改作であります。今日では六段目の“八百屋”だけが残っており、それも段末の“櫓”の部分だけを上演する機会が多くなっています。

(お七)純情な娘お七が恋人である吉祥院の小姓吉三郎の探し求める刀を今夜中に届けねば、命にかかわると聞きました。町の木戸は閉ざされて通行が禁じられています。出火の合図以外には禁止されている火の見櫓の半鐘を打って木戸をあけさせようと、降りしきる雪の中で、足をすべらせながら櫓にかけ登ります。文楽人形の離れ業を見せる「伊達娘恋緋鹿子」の一節です。